

Oracle Standard Management Pack

日本語リリース・ノート

リリース 2.2

2001 年 2 月

J02273-01

原典情報: Readme for the Oracle Standard Management Pack Release 2.2.0.0.0 (A85221-02)

目次

1. 概要	3
1.1 この文書の目的	3
1.2 リリース 2.2 製品コンポーネント	3
1.3 日本語 Quick Tour CD-ROM	4
2. 互換性一覧	4
2.1 データベースの互換性	4
2.2 Intelligent Agent と Oracle Server	5
2.3 Enterprise Manager リリースと Intelligent Agent	5
2.4 Enterprise Manager 製品と Management Server / リポジトリ	6
2.5 Intelligent Agent と Management Pack	6
3. インストール時の問題点	7
4. Oracle Enterprise Manager	7
4.1 新機能	7
4.2 コンソール	11
4.3 イベント・システムおよびジョブ・システム	12
4.5 ポケットベルおよび電子メールのブラックアウト	14
4.6 DBA Management Pack	14
4.7 Oracle Management Server (OMS)	15
4.8 Enterprise Manager Configuration Assistant	17



Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

4.9	Enterprise Manager Migration Assistant	17
4.10	ブラウザベースの Enterprise Manager.....	17
4.11	統合アプリケーション	18
4.12	その他.....	19
5.	Oracle Standard Management Pack	21
5.1	新機能.....	21
5.2	一般的な問題	22
5.3	Oracle Change Manager.....	22
5.4	Oracle Performance Manager.....	24
5.5	Oracle Advanced Events	25
5.6	Oracle TopSessions	26

1. 概要

1.1 この文書の目的

このリリース・ノートには、Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 製品と、ドキュメントに記載されている機能との相違点が記載されています。Oracle Standard Management Pack のマニュアルに関する情報と、このリリースに関する最新情報も記載されています。

この製品を使用する前に、Oracle Enterprise Manager について理解することが重要です。Oracle Standard Management Pack の使用開始前に、『Oracle Enterprise Manager 概説』および『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を必ずお読みください。

1.2 リリース 2.2 製品コンポーネント

コンポーネント名	リリース番号
Oracle Enterprise Manager Pack Client	2.2.0.0.0
Oracle DBA Management Pack	2.2.0.0.0
Oracle Schema Manager	2.2.0.0.0
Oracle Storage Manager	2.2.0.0.0
Oracle Security Manager	2.2.0.0.0
Oracle Instance Manager	2.2.0.0.0
SQL*Plus Worksheet	2.2.0.0.0
Oracle DBA Studio	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Integrated Applications	2.2.0.0.0
Oracle interMedia Text Manager	2.2.0.0.0
Oracle Spatial Index Advisor	2.2.0 *
Oracle Directory Manager	2.1.1.0.0
Oracle Forms Server Manager	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Security Manager	2.0.0.1.0
Net8 Integration	8.1.7.0.0
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	2.2.0.0.0
Oracle Standard Management Pack	2.2.0.0.0

Oracle Enterprise Manager Events	2.2.0.0.0
Oracle Diagnostics Pack Advanced Events	2.2.0.0.0
Oracle Management Pack for SAP R/3 Advanced Events	2.2.0.0.0 *
Oracle Management Pack for Oracle Applications Advanced Events	2.2.0.0.0
Oracle Management Server	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Web Site	2.2.0.0.0
Oracle HTTP Server	1.3.12.0.1a
Oracle HTTP Server Extentions	8.1.7.0.0
Apache Module for Oracle Servlet Engine	8.1.7.0.0
Oracle Mod PL/SQL Gateway	3.0.0.8.0
BC4J Runtime	3.2.1
Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	8.1.7.0.0
Oracle Enterprise Manager Quick Tours	2.2.0.0.0
Enterprise Manager Documentations	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Paging Server	2.2.0.0.0

注 1: コンポーネントは製品メディアに含まれる製品コンポーネント一覧を記載したもので、製品ライセンスとは対応していません。

注 2: *印のついているコンポーネントは、日本ではサポートされません。

1.3 日本語 Quick Tour CD-ROM

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 内には、英語版 Quick Tour が含まれています。日本語版 Quick Tour を参照する場合は、添付の日本語 Quick Tour CD-ROM を使用してください。

2. 互換性一覧

2.1 データベースの互換性

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 は、7.3.4、8.0.6、8.1.x のバージョンの Oracle データベースで動作します。

2.2 Intelligent Agent と Oracle Server

Oracle Intelligent Agent は、同一リリースまたは旧リリースのデータベースと互換性があります。しかし、旧リリースの Intelligent Agent と、それより新しいリリースの Oracle データベースは互換性がありません。新しいリリースの Intelligent Agent を使用して、旧リリースのデータベースを管理する場合、Intelligent Agent は、それ自身の Oracle ホーム、または Intelligent Agent と同じバージョンの Oracle ホームにインストールする必要があります。

次の表に、Intelligent Agent の各リリースと Oracle Server の各リリースとの互換性を示します。Intelligent Agent のリリースが特定のサーバー・リリースで動作することが確認されている場合、その項目に「あり」と記されています。Agent が特定のサーバー・リリースで動作することが確認されていない場合、その項目に「なし」と記されています。補足コメントは注記されています。

Oracle Server リリース番号					
Intelligent Agent リリース番号	7.3.4 注 1	8.0.6	8.1.5	8.1.6	8.1.7
Intelligent Agent v7.3.4	あり	なし	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.0.4	あり	なし	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.0.5 注 2	あり	なし	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.0.6 注 2	あり	あり	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.1.5 注 2	あり	あり	あり	なし	なし
Intelligent Agent v8.1.6 注 2	あり	あり	あり	あり	なし
Intelligent Agent v8.1.7 注 2	あり	あり	あり	あり	あり

注 1: 個別にライセンス契約が必要な Oracle Standard Management Pack の一部の機能は、7.3.4 以前のリリースでは使用できません。制限の詳細は、各項目を参照してください。

注 2: Intelligent Agent リリース 8.0.5、8.0.6 および 8.1.x には、データ収集サービス (Data Gatherer) が付属しています。

2.3 Enterprise Manager リリースと Intelligent Agent

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 は、Intelligent Agent リリース 7.3.4 以上のバージョンで動作します。

ただし、Windows NT で実行中の Intelligent Agent とともに Enterprise Manager リリース 2.x を実行するには、リリース 8.1.5 以上の Intelligent Agent を使用するか、既存のリリース 7.3.x または 8.0.x の Intelligent Agent を Intelligent Agent パッチ・リリース 7.3.4.1 または Intelligent Agent パッチ・リリース 8.0.5.1 にアップグレードする必要があります。これらのパッチのいずれかを入手するには、オラクル社カスタマ・サポート・センター担当者にご連絡ください。

2.4 Enterprise Manager 製品と Management Server / リポジトリ

Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、個別にライセンス契約が可能な Management Pack、Management Server およびリポジトリは、すべて同じリリースのものである必要があります。たとえば、リリース 2.1 の Management Server とリポジトリをリリース 2.2 のコンソールとともに使用することはできません。また、リリース 2.1 の Management Server とリポジトリをリリース 2.2 の Management Pack とともに使用することはできません。Enterprise Manager リリース 2.2 製品では、リリース 2.2 の Management Server とリポジトリを使用する必要があります。これは、次のいずれかの製品が参照するためです。

Oracle Enterprise Manager コンソール

Oracle DBA Management Pack

Oracle Tuning Pack

Oracle Diagnostics Pack

Oracle Change Management Pack

Oracle Management Pack for Oracle Applications

Oracle Standard Management Pack

既存の Management Server とリポジトリのバージョンが古い場合は、最新のバージョンに移行またはアップグレードできます。Management Server とリポジトリをリリース 2.2 に移行またはアップグレードする場合、リポジトリとともに使用する Enterprise Manager 製品がすべてリリース 2.2 であることを確認してください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.1 や Change Management Pack リリース 2.1 をまだ使用しているのであれば、Management Server とリポジトリはリリース 2.2 にアップグレードしないでください。使用するリリース 2.2 の Management Pack ソフトウェアを取得する前に、Management Server とリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードすると、古い Management Pack 製品は使用できなくなります。

移行とアップグレードの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

2.5 Intelligent Agent と Management Pack

ジョブおよびイベントに関連するこのリリースの新機能すべてには、バージョン 8.1.7 の Intelligent Agent が必要です。旧バージョンの Intelligent Agent の重複ジョブおよびイベントは、下位互換性のためにこのリリースに含まれます。旧バージョンは今後のリリースではサポートされない可能性があるため、Oracle では、ジョブとイベントを新しい対応箇所に移行することを強くお勧めします。

注意: Intelligent Agent は、最新のものを新しい Oracle ホームにインストールすることを強くお勧めします。これにより、古い技術スタックを必要とする Oracle 製品に影響を与えることなく Intelligent Agent をアップグレードできます。

3. インストール時の問題点

1. Enterprise Manager Web サイトをインストールする場合、「サマリー」ページに一覧表示される領域要件に加えて、一時ディレクトリに 150～200MB 程度の空き領域があることを確認してください。この領域は、インストール中に **Installer** がファイルの中間処理を行うために使用します。**Windows NT** プラットフォームでは、一時ディレクトリは **TEMP** システム環境変数で指定します。**Solaris** では、**/tmp** にあります。(Bug#1357839)
2. サイレント・インストール中、リポジトリを作成/編集する **Enterprise Manager Configurations Assistant (EMCA)** は自動的に起動しません。サイレント・インストール終了後、手動で **EMCA** ツールを起動してください。(Bug#1379570)
3. インストール中にインストールを終了する場合、または何らかの理由によりインストールが完了しなかった場合は、**Universal Installer** はインベントリにインストールを登録しません。ただし、ファイルは選択した **Oracle** ホームにコピーされている可能性がありますので、手動でこれらのファイルを削除し、インストールを再度実行することをお薦めします。
4. インストールした製品を、(**Universal Installer** を使用せずに) ディレクトリを削除して物理的に削除した場合、新製品をインストールする前に、インストールとディスク・イメージが同期化されるように **Universal Installer** を使用して標準の削除プロセスを実行してください。
5. スペースを含んだ名前では **Enterprise Manager** または **Standard Management Pack** リリース 2.2 を **Oracle** ホームにインストールしようとした場合、その製品は機能しません。インストールする **Oracle** ホーム名には、スペースが含まれていないことを確認してください。

4. Oracle Enterprise Manager

4.1 新機能

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

4.1.1 Enterprise Manager コンソール

- コンソールのフォント・サイズ設定の変更。
- コンソール内の全ノードのリフレッシュ方法の強化。
- ノードおよびエージェントの詳細をコンソールのナビゲータから表示できます。この情報を表示するには、ナビゲータ・ツリーでノードを右クリックし、表示されたメニューから「プロパティ」を選択します。ノードで **Intelligent Agent** リリース 8.1.7 が稼働している場合は、オペレーティング・システム情報も表示されます。

4.1.2 パフォーマンスの向上

コンソールおよび DBA Studio のパフォーマンスを向上させるため、大幅な改良が加えられました。次の操作を行う際のパフォーマンスが向上しています。

- コンソールおよび DBA Studio の起動
- コンソールのナビゲータ・ツリーの拡張
- ナビゲータ・ツリーで選択したオブジェクトの詳細表示

ブラウザベースのコンソールの場合、Web サーバーに初めて接続する際には、jar ファイルをダウンロードする間、進捗ダイアログが表示されます。

4.1.3 Apache Web サーバーおよび Apache for iAS Web サーバーのサポート

検出、ステータス・イベント、ジョブおよび通知などの新機能により、一般的な Apache および iAS Apache Web サーバーの中間層環境を管理できます。パフォーマンス監視、拡張イベントおよびレポートなどの拡張機能が Diagnostics Pack に組み込まれています。

基本的な管理およびイベントの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 2 章「ナビゲータ」を参照してください。

拡張イベントおよびパフォーマンス監視の詳細は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Diagnostics Pack スタート・ガイド』の第 5 章「Oracle E-Business Management Tools」と第 7 章「Oracle Advanced Event Tests」を参照してください。

4.1.4 ジョブ・システムおよびイベント・システム

4.1.4.1 イベント・システムに追加された新機能

- 新しいオペレーティング・システム固有のノード・イベント
- 拡張されたノードの動作・停止イベント
- Intelligent Agent リリース 8.1.7 による重複イベントのサポート
- イベント・テストの状況依存ヘルプ
- ターゲット・サブコンポーネントの拡張された監視

詳細は『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 5 章「イベント」を参照してください。

4.1.4.2 ジョブ・システムの新機能

- ジョブ・タスクの状況依存ヘルプ
- 電子メール通知にジョブ出力を含めるオプション

4.1.5 拡張通知

- ポケットベル・サーバーが、Intelligent Agent を必要としない独立したサービスになりました。コンソール内からポケットベル・サーバーを構成することもできます。
- 拡張通知（ポケットベルおよび電子メール）のコンテキストとフォーマットをコンソール内からカスタマイズできるようになりました。イベントおよびジョブ・ステータス通知に応じて、電子メールおよびポケットベルに異なるフィルタを指定することもできます。

詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第1章「コンソール」を参照してください。

4.1.6 エンタープライズ・レポート

Management Server で管理している全ターゲットの詳細を含む HTML レポートを生成できるようになりました。レポートに含まれる情報は、イベント警告、スケジュール済ジョブ、グループおよび検出済サービスです。ウィザードを使用して、これらのレポートが定期的に生成されるように設定できます。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第1章「コンソール」を参照してください。

また、オブジェクト定義、オブジェクト従属情報およびデータベース構成の HTML データベース・レポートや、カスタム問合せなどのその他のレポートも生成できます。詳細は、Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

4.1.7 DBA Studio

- リソース管理の強化: リソース消費グループのリソース計画を作成するウィザード、リソース消費アクティビティのグラフィカル表示、リソース計画スケジューリングのサポート。
- データベースへの接続時にアプリケーションが行った DDL および DML の全変更のロギング。
- Replication Manager の強化: DBA Studio へのレプリケーション管理の統合、ツリーおよびプロパティ・ページの直観的な新しいレイアウト。
- JServer オブジェクトの参照、クラスの実行、リンクおよびディレクトリの作成、およびセキュリティ・オプションの指定。
- データベース・オブジェクトの DDL の表示。
- 分析ウィザードは、8i の新しい統計生成方法 (DBMS_STATS) をサポートしており、データベースに対して分析をただちに実行できます。
- マテリアライズド・ビューの強化: ジョブ・システムを使用したマテリアライズド・ビューの作成/移入、作成後に分析を行うオプション。

- バックアップ・ウィザードでのイメージ・コピー。
- 従属オブジェクトをリストとツリーのいずれかで表示し、表示からオブジェクトを直接編集。
- 表への列権限の付与。
- データ管理ウィザードでのジョブのエラーおよび警告に対する失敗と成功のインジケータ。
- レンジ・パーティション化の新しいグラフィカル・インタフェース。
- フォント設定の変更。

4.1.8 OMS チューニング用パラメータ

特殊な状況の下では、特定の OMS チューニングが必要な場合があります。チューニングを行うには、一部の OMS 構成パラメータを設定します。

設定するパラメータは、次のとおりです。

- oms.vdp.ping_interval
- oms.vdg.max_out_conns
- oms.vdg.max_in_conns
- oms.repository.connect_timeout
- oms.repository.connect_numTries

詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

4.1.9 Intelligent Agent バージョン 8.1.7

- 複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) の明確なサポート: この機能により、Intelligent Agent はマシン上の主 NIC で受信ジョブ/イベント要求をリスニングできます (デフォルト)。その他のオプションを使用すると、Agent によるリスニングをユーザー指定の NIC と全 NIC のどちらで行うかを構成できます。
- 重複イベントのサポート: この機能により、同じパラメータを持つ重複イベント・テストを同じターゲット (データベース、リスナーなど) に対して登録できます。
- データ収集用移行ユーティリティ: nmumigrate という新しいコマンド行ユーティリティにより、ユーザーは、既存 Intelligent Agent の Data Gatherer で実行されている既存のデータベース収集を、Intelligent Agent リリース 8.1.7 の Data Gatherer で認識される新しいフォーマットに移行できます。
- Intelligent Agent リリース 8.1.7 へのアップグレード時に、既存の Enterprise Manager のジョブまたはイベントを移行: この方法により、ユーザーは既存のジョブまたはイベント

を手動で素早く移行することができます。ジョブまたはイベント・ライブラリに保存してから、登録解除して再発行する必要はありません。

- MS Windows NT での自動スタートアップ: 特定の状況では、Intelligent Agent および Data Gatherer サービスがインストール後に自動的に起動されます。

注意: これらの機能および強化の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

4.2 コンソール

1. コンソールの起動後に別のウィンドウを選択した場合、ログイン・ダイアログが手前に表示されません。アクティブなウィンドウをすべて最小化するか、[Alt]+[Tab]を使用してコンソール・アプリケーションを選択し、ログイン・ダイアログを手前に表示する必要があります。(Bug#806713)
2. コンソールからの接続用に Management Server 名を設定するときには、ノードの完全修飾名 (foo.us.oracle.com など) を使用することをお勧めします。完全修飾名を使用しないと、Management Server と同じ DNS ドメインに属していないマシンでコンソールが実行されている場合に、一部の Management Pack ツールをコンソールから起動できない可能性があります。完全修飾名を使用してもコンソールから一部のツールを起動できない場合は、ローカルの 'hosts' ファイルに、Management Server が実行されているホストの IP アドレスを示すエントリを追加してください。
3. 1 つのウィンドウで項目を選択したときに、その前に選択した項目がクリアされないため、2 つの項目が同時に選択されているように見えることがあります。最後に選択した項目が実際に選択されている項目です。通常、新しいウィンドウで別の項目を選択すると、この問題を解決できます。(Bug#618771)
4. コンソールのトレース・パラメータにおける構文の変更

すべてのクライアント・トレース・パラメータから OEM.接頭辞が削除されました。現在のトレース・パラメータは次のとおりです。

TRACING.ENABLED

TRACING.LEVEL

\$ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリにある clientconfig.properties ファイルに、これらのパラメータを追加してください。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

5. コンソールおよび DBA Studio からデータベースを起動した場合、日本語環境では起動時刻やセッション情報が文字化けする場合があります。一度データベースとの接続を切断し、再度接続していただくことで、正常に表示されます。

4.3 イベント・システムおよびジョブ・システム

1. イベントの手動消去

次の 5 つの拡張イベントは自動的に消去されません。

データベース警告

データ・ブロック破壊

セッション終了

アーカイバの停止

Data Gatherer 警告

つまり、これらのイベントのいずれかが発生し、問題が手動で解決された場合、問題が解決されたことを自動的に検出する方法がないため、イベントは自動的に消去されません。

したがって、イベント発生の原因となった問題の解決後には、次のようにしてイベントを手動で消去する必要があります。

a) EM コンソールにあるイベント画面の「警告」タブで、発生したイベントを「履歴」タブに移動します。

b) 「履歴」タブで、このイベント発生を削除します。

これらのステップによりイベントが消去され、このイベントのために警告として設定されていたグループ画面の赤い旗もリセット（緑に変わる）されます。

2. 重複イベント

Enterprise Manager 2.2 では、イベントが Intelligent Agent リリース 8.1.7 に対して登録されている場合は、重複イベントを発行できます。重複イベントとは、同じパラメータを使用する同じイベント・テストを持ち、同一ターゲットに登録されたイベントのことです。たとえば、警告しきい値が 80%、警戒しきい値が 60% の表領域満杯テストを、同じ USERS 表領域に対して複数回登録できるということです。ただし、同じイベント内にこれと同じイベント・テストを持つことはできません。したがって、この例の場合、重複する表領域満杯テストは、異なるイベントに属する必要があります。

重複イベントは、リリース 8.1.7 以前の Intelligent Agent では使用できません。特定のノード上で稼働している Intelligent Agent のバージョンを調べるには、EM コンソールのナビゲータ・ツリーでそのノードを右クリックし、「プロパティ」を選択します。

リリース 8.1.6 以前の Intelligent Agent で稼働している Enterprise Manager リリース 2.1 では、重複イベントは使用できません。

リリース 8.1.5 以前の Intelligent Agent で稼働している Enterprise Manager リリース 2.0.4 でも、重複イベントは使用できません。

3. 同義イベント・テスト

同義イベント・テストは、同じイベント内で同じ測定基準を監視するテストですが、使用するパラメータは異なります。たとえば、異なる表領域に登録されているが、同じイベントに属しているという2つの表領域満杯イベント・テストがそれに当たります。

同義イベント・テストは、Enterprise Manager 2.2 およびサポートされている全てのバージョンの Intelligent Agent でサポートされます。

4. Enterprise Manager 2.0.4 リポジトリからの同義イベントの移行

Enterprise Manager リリース 2.0.4 リポジトリから Enterprise Manager リリース 2.2 リポジトリへアップグレードする際、Enterprise Manager リリース 2.0.4 に同義イベント（同一だที่ใช้するパラメータが異なるイベント・テストを複数持つイベント）がある場合、リポジトリのアップグレード後に、リリース 2.2 コンソールを起動してから、これらの同義イベントの登録を解除し、再登録する必要があります。

- ジョブ履歴またはイベント履歴をリフレッシュする際、リフレッシュする履歴の量が多いと、最初は画面に何も表示されません。この問題を解決するには、スクロール・バーの位置を調整してください。（Bug#819774）

6. Windows 2000 のノードでのジョブの実行

Windows 2000 のノード上でジョブを実行する際、ジョブは「C:\winnt\temp¥21041345280.99が見つかりません」というエラーで失敗する可能性があります。Windows 2000 では異なるオペレーティング・システム・レベルのセキュリティを設定できるため、TEMP ディレクトリに対する権限が不十分なことから、このエラーが生じます。この問題が発生した場合は、どのユーザーも TEMP ディレクトリ内でファイルを作成、更新および削除できることを確認してください。TEMP ディレクトリは、TEMP 環境変数で表されるディレクトリです。また、TEMP 環境変数で示されるディレクトリにも、作成、更新および削除権限があることを確認してください。最後に、ジョブを再発行する必要があります。

- Oracle Management Server 経由での、データベース起動はできません。DBA Studio をスタンドアロンで起動し、データベース起動を行なってください。（Bug 1377901）
- ローカル管理の表領域作成では、デフォルトでエクステンツ管理に「ローカル管理」が選択されていますが、実際にローカル管理表領域を作成するには一度「ディクショナリ管理」を選んで再度「ローカル管理」を選んでください。ローカル管理の表領域を作成する場合は、SQL 表示ボタンを押し、生成された SQL 文に「EXTENTMANAGEMENT LOCAL」が含まれていることを確認してから実行・作成することを推奨します。（Bug#1478964）
- マテリアライズド・ビュー作成ダイアログでジョブ発行ボタンを押した場合、エラーが発生し正しくジョブが発行されません。（Bug#1479075）

10. ジョブを使用して、Intelligent Agent リリース 8.1.6 が稼動している Windows NT ノード上のデータベースを停止する場合、データベースの停止状態に関わらず、完了ステータスが「失敗」で返ってきます。(Bug#1478931)
11. TCL ジョブの入力/出力データに日本語などのマルチバイト文字を伴う場合は、文字コード変換を行わないと、ジョブが正常に動作しない場合があります。必ず、「convertin」および「convertout」関数を用いて、明示的に文字コード変換を行ってください。

4.5 ポケットベルおよび電子メールのブラックアウト

1. ポケットベルと電子メールのブラックアウトを特定の曜日に設定し、指定した曜日の真夜中を超えるブラックアウトを行うことはできません。たとえば、水曜日の午後 11 時 30 分に開始して木曜日の午前 1 時 30 分まで続く 2 時間のブラックアウトは作成できません。これを行うには、水曜日の午後 11 時 30 分から午前 12 時と、木曜日の午前 12 時 1 分から午前 1 時 30 分という、2 つの別々のブラックアウトを作成する必要があります。(Bug#1036820)
2. 「間隔指定」で実行されるブラックアウトを定義する場合は、ブラックアウトの「有効期間」には終了日を設定しないでください。(たとえば、有効期間は、「開始: 07/30/00 終了: <指定しない>」のように指定します。) 終了日を指定すると、その期間の最終サイクルでブラックアウトが実行される問題が発生します。終了日を指定しないままにして、この問題を回避してください。(Bug#1367312)

4.6 DBA Management Pack

1. スキーマ名にデリミタとして"."が含まれていると、このスキーマの下にあるオブジェクトを表示する際に、詳細が空になります。(Bug#1055740)
2. サマリー・アドバイザー・ウィザードを使用するには、listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルに外部プロシージャ・エージェントを設定する必要があります。詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。
3. OS 認証は、データベースに直接接続しているとき (クライアント/サーバー・モード) にのみ機能します。Management Server を介して接続しているときには、OS 認証はサポートされません。
4. SQL*Plus Worksheet の実行中に「SP2-0738 Restricted command」エラーが発生すると、SQL*Plus が OMS に接続する際、サーバー側のファイル・システムにアクセスできません。この場合、OMS マシン上でスクリプトの実行が試みられ、SQL*Plus プロセスが制限モードで実行されます。セキュリティ上の理由で、クライアント側のスクリプトのみが、「ローカル・スクリプトの実行...」メニューにより実行できます。詳細は、「SQL*Plus Worksheet ヘルプ」を参照してください。
5. レプリケーション (サーバー側) は、レプリケーション環境を定義するために、DBA Studio Replication Management オプションを使用する前にインストールする必要があります。レ

アプリケーションがインストールされていないと、ウィザードで実行されるタスクはすべて失敗します。

6. LONG または LONG RAW データ型の列が含まれる索引構成表 (IOT) はパーティション化できないため、LONG または LONG RAW データ型の列が主キー列でない場合は、エラー・メッセージが正しく表示されなくなり、パーティションが入力可能になります。IOT に LONG または LONG RAW データ型の列が含まれ、それが主キーの場合は、「LONG/LONG RAW データ型列を持つ表はパーティション化できません」というエラー・メッセージが正しく表示されます。
7. データベース・レポートのスケジューリングは、ユーザーが SYSDBA としてログインし、そのユーザーのパスワードが NORMAL での接続時と SYSDBA での接続時で異なる場合は失敗します。これを回避するため、レポートのスケジューリングには NORMAL で接続してください。SYSDBA で接続すると、レポートのスケジューリングでは無視されますので、注意してください。(Bug#1360896)
8. レプリケーション・ウィザードは、DBA Studio からのみ起動できます。Enterprise Manager コンソールを使用する場合、まず DBA Studio を起動してからレプリケーション・ウィザードを起動してください。(Bug#1365244)
9. DBA Studio で格納された構成を編集するとき、マウスの右クリックにより出現したメニューで「編集」を選択し、さらに出現したダイアログで「OK」をクリックした場合、エラーが発生する場合があります。この場合、変更はセーブされていますので、「取消」を選択してダイアログを終了してください。(Bug#1377721)
10. SQL*Plus Worksheet を日本語環境でご使用の場合、`$ORACLE_HOME¥sysman¥config¥dbappscfg.properties` に次のパラメータを指定してください。

`SQLPLUS_NLS_LANG=` (お使いの環境に合わせた NLS_LANG 値)

`SQLPLUS_SYSTEMROOT=` (お使いの環境の %SystemRoot% 環境変数の値)

※¥マークは、dbappscfg.properties 内に記述されている例に従い¥¥としてください。

<例>

`SQLPLUS_NLS_LANG=Japanese_Japan.JA16SJIS`

`SQLPLUS_SYSTEMROOT=C:¥¥WINNT`

4.7 Oracle Management Server (OMS)

1. Windows での OMS サービスの作成

Windows NT および Windows 2000 では、サービスとしての OMS の作成は、Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) によって実行されるようになりました。つまり、

OMS サービスは、インストール時に、新規リポジトリを作成または既存リポジトリを使用するために EMCA を使用した場合にのみ作成されます。

OMS サービスは「手動」起動タイプで作成されます。これは、構成が不適切または不十分な OMS の自動起動を防ぐために設計されました。OMS が適切に構成され、テストが行われると、OMS のサービス・タイプを必要に応じて「自動」に変更できます。次の手順で、これを実行できます。

- 1) 「コントロール パネル」の「サービス」オプションを起動します。
- 2) OMS サービス（「Oracle<Oracle ホーム名>ManagementServer」という名前）を選択します。
- 3) 「スタートアップ」ボタンをクリックし、適切な「スタートアップの種類」タイプのラジオ・ボタンを選択します。

2. 強化された OMS 起動

oemctrl ユーティリティを介して OMS を起動すると、OMS の起動時に進捗インジケータが表示されます。OMS が完全に起動した場合にのみ、OMS が起動したことを示すメッセージが表示されます。OMS の起動時に問題が生じた場合は、該当するエラーが発生します。oemctrl を使用して Windows NT または 2000 で OMS を起動し、起動が完了すると、「コントロール パネル」内の対応するサービスにも「開始」ステータスが反映されます。

Windows NT または 2000 上のサービスとして OMS を起動すると、OMS が完全に起動した後にも、ステータスが「開始」になります。

起動時に問題が発生した場合は、\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリにある oms.nohup ファイルを参照してください。

3. OMS の停止

Windows NT および 2000 上で、「コントロール パネル」からサービスとしての OMS を停止すると、停止を実行するための接続情報を尋ねるダイアログ・ボックスが表示されます。指定する接続情報は、有効な Oracle Enterprise Manager スーパーユーザー・アカウントです。

4. OMS のステータス

OMS のステータスを調べるには、新しい oemctrl オプション、oemctrl ping oms を使用できます。このオプションは OMS が使用可能かどうかを調べるのに適しています。接続情報は必要ありません。

5. Solaris から HP への接続

OMS が Solaris ノードで、EM リポジトリ・データベースが HP 10.20 ノードで稼働している場合は、次の SQLNET.ORA パラメータを OMS ノードで設定する必要があります。

```
DISABLE_OOB=ON
```


SQLNET.ORA ファイルは、\$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにあります。
\$ORACLE_HOME は、OMS がインストールされているディレクトリです。このパラメータは、Sun と HP の TCP 層による同じソケットでの同時緊急メッセージの処理方法が異なるために生じる sqlnet 接続の停止を防ぎます。

このパラメータを設定した後、OMS を停止し、再起動する必要があります。

6. Oracle Management Server の状態表示

コマンドプロンプトで「oemctrl status oms <スーパー管理者名>/<パスワード>」コマンドを実行しても、VXA-2009 エラーが発生し状態表示が行なえない場合があります。

4.8 Enterprise Manager Configuration Assistant

1. リリース 2.2 以前のリポジトリ

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 以前の既存リポジトリは、インストール時に自動的にアップグレードされません。リポジトリに対するアップグレードは、各種 Enterprise Manager 製品でそのリポジトリを使用する既存ユーザーに影響を与えます。リポジトリのユーザー全員が、コンソール、DBA Studio、Management Pack など、各自のソフトウェアをリリース 2.2 にアップグレードするまで、リポジトリのアップグレードは行わないでください。リポジトリのアップグレードに適した時期をスケジュールした後、EMCA を使用してアップグレードを実行します。

2. EMCA によるリポジトリのアップグレード

リポジトリのアップグレードを実行するには、明示的に Configuration Assistant (EMCA) を実行し、「アップグレード」オプションを選択する必要があります。「アップグレード」オプションを選択し、DBA 権限を持つアカウントを使用してログインすると、EMCA にはアップグレード可能な既存のリポジトリが表示されます。リポジトリがリストにない場合は、EMCA によってアップグレードできないことを意味します。アップグレードするリポジトリを選択し、操作を続けます。

Windows NT または 2000 上で EMCA を実行中の場合は、EMCA のアップグレードにより、まだ作成されていない OMS サービスも作成されます。

4.9 Enterprise Manager Migration Assistant

- 一部のサービスについて、優先接続情報リストをリリース 1.x リポジトリからリリース 2.2 リポジトリに移行できない場合があります。この場合は、リリース 2.2 コンソールで、そのサービスの優先接続情報リストを手動で設定する必要があります。(Bug#751627)

4.10 ブラウザベースの Enterprise Manager

- ブラウザベースの Enterprise Manager にログインした後、コンソールが停止していることに気づいた場合は、(1)使用している Web ブラウザでプロキシが設定されていないこと、

および (2) 使用されている MSVCRT.DLL がバージョン 5.00.7303 より後のバージョンであることを確認してください。MSVCRT.DLL のバージョンは、システム・パスでこの dll を検索することにより調べられます。パスで見つかった最初の dll は、使用中のものではないことがときどきあります (この dll は c:\winnt\40\system32 からロードされたものと考えられます)。使用中の dll を確認するには、コンソールの停止中にその dll の名前を変更してみてください (Windows NT エクスプローラでは、使用中の dll の名前を変更できません)。dll のバージョンは、プロパティを参照することで確認できます。dll を置換するには、次の手順で行います。

DOS シェルからの場合:

- 1) dll が存在するディレクトリにディレクトリを変更します。
 - 2) msvcrt.dll の名前を「_msvcrt.dll」に変更します。
 - 3) 正しいバージョンの msvcrt.dll を元のディレクトリにコピーします。
 - 4) マシンを再起動します。
2. Web サーバーに初めて接続すると、jar ファイルがダウンロードされます。ブラウザ・プロセスは、ダウンロード時に多くのメモリーを消費するように見える場合があります。ダウンロードが完了した後、ブラウザを終了し、EM コンソールを起動する前に再起動してください。
3. Enterprise Manager の起動ページから EM コンソール、DBA Studio または SQL Worksheet を起動すると、選択したアプレットを実行するために別のブラウザ・ウィンドウが作成されます。これにより、元のブラウザ・ウィンドウは別の目的に使用できます。
- この別のブラウザ・ウィンドウは閉じないでください。閉じると、アプレットも停止してしまいます。
4. 複数の言語をインストールして複数の言語を使用して Web ブラウザから Enterprise Manager を使用するには、以下の URL を使用してください。

http://<マシン名>:3339/EmWebSite_xx.html (xx は言語名、日本語は"ja")

もし一つの言語で使用する場合は、EmWebSite_xx.html を EmWebSite.html にコピーし、「http://<マシン名>:3339/ 」という URL を使用してください。

4.11 統合アプリケーション

4.11.1 Oracle *interMedia* Text Manager

1. Oracle *interMedia* Text Manager の起動時に現れるダイアログ・ボックスに無効なサービス名を入力すると、*interMedia* Text Manager の動作が停止する場合があります。
2. 「作成 オブジェクト」ダイアログを取り消すと、*interMedia* Text Manager が終了する場合があります。

3. *interMedia Text Manager* を用いて、INDEX_SET プリファレンスを作成することはできません。(Bug#1480444)
4. *interMedia Text Manager* を用いて、MULTI_STOPLIST を用いたテキスト索引の作成はできません。MULTI_STOPLIST を用いてテキスト索引を作成する場合、コマンドラインから作成を行ってください。(Bug#1480463)
5. *interMedia Text Manager* から ConText Server を起動すると、正常に起動したか否かに関わらず「Job failed: Error Output from job xxx lost.」というメッセージが表示されます。OEM Console のジョブ履歴にも、ConText Server 起動ジョブが失敗のステータスで記録されます。(Bug#1587092)

4.11.2 Oracle Forms Server Manager

1. Forms リスナー・ログ・ファイル内の日本語文字は文字化けしています。(Bug#1286040)
2. 「Forms リスナーの作成」ダイアログ内で、「ソケット」モードは選択できません。(Bug#1370422)

4.11.3 Oracle Enterprise Security Manager

1. Enterprise Security Manager の起動時にダイアログ・ボックスが現れますが、このダイアログ・ボックスからヘルプを起動すると、ヘルプ・ダイアログは入力を全く受け付けられない場合があります。この場合は、Enterprise Security Manager 本体の「ヘルプ」メニューからオンライン・ヘルプを起動してください。(Bug#1183164)

4.11.4 Oracle Parallel Server Manager

1. Parallel Server を含むノードをナビゲータから削除した場合、ナビゲータ内の表示が一部正常でなくなる場合があります。その場合、ナビゲータを一旦最上位まで縮小し、それからナビゲータを拡張してください。(Bug#1051444)
2. Parallel Server に対するデフォルト接続情報が設定されていない場合、Oracle Enterprise Manager はデータベースのデフォルト接続情報を使用し、Parallel Server インスタンスに接続を試みます。その場合は、その Parallel Server に対する優先接続情報、もしくは Parallel Server 一般のデフォルト接続情報を設定してください。(Bug#1051439)
3. Oracle Enterprise Manager 内に表示される Oracle Parallel Server のアイコンの表示が適切でない場合があります。(Bug#1106032、1106004)

4.12 その他

1. Enterprise Manager、または Enterprise Manager に統合されているアプリケーションが Windows 95 または Windows 98 で起動すると、そのアプリケーションと一緒に起動された DOS ウィンドウが現れます。DOS ウィンドウは閉じないでください。DOS ウィンドウを

閉じると、起動されていた Enterprise Manager アプリケーションが終了してしまいます。
(Bug#1161051)

2. JRE は、各種 Oracle 製品によりインストールされます。ただし、共有 JRE は 1 システムにつき 1 つに限られます。したがって、Enterprise Manager リリース 2.2 のインストール後に以前のリリースの Enterprise Manager (リリース 2.0 または 2.1) をインストールすると、リリース 2.2 の一部としてインストールされた JRE (Java Runtime Environment) が、自動的にダウングレードされ、エラー・メッセージは表示されません。JRE リリース 1.1.7.30o から JRE リリース 1.1.7.5o または 1.1.7.24o へのダウングレードは、Enterprise Manager リリース 2.2 の問題の原因となります。したがって、Enterprise Manager リリース 2.2 のインストール後に、Enterprise Manager リリース 2.0 または 2.1 をインストールしないでください。

8.1.7 以前の Oracle データベースをインストールしても、同様に JRE のダウングレードという問題が生じます。

この状態になった場合は、Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールした CD-ROM (ほとんどの場合はリリース 8.1.7 CD-ROM) から JRE リリース 1.1.7.30o を再インストールすることにより、問題を回避できます。Oracle Universal Installer を再インストールして、JRE をインストールし直します。Installer は、JRE に依存しているためです。

3. Enterprise Manager の英語以外のバージョンでは、英語以外のオンライン・ヘルプで一部矛盾が生じる可能性があります。最新情報は日本語リリース・ノートを参照してください。

5. Oracle Standard Management Pack

5.1 新機能

5.1.1 Oracle Change Manager

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 の Change Manager 機能には、次の機能が追加されました。

5.1.1.1 パフォーマンスの改善

次のような操作のパフォーマンスが大幅に改善されました。

- ベースラインの獲得
- 比較操作（コマンド行インタフェースの「比較」コマンド）

5.1.1.2 索引統計および表統計の比較

管理者は、索引統計および表統計の比較に、「データベース・オブジェクトの比較」アプリケーション（旧 DB Diff）の「統計の比較」機能を使用できます。「統計の比較」オプションを使用可能にすると、表および索引の統計が比較されます。「統計」プロパティ・ページに表示される表および索引の統計は、すべて比較に使用されます。表および索引の統計比較には、タイム・スタンプは含まれません。

5.1.1.3 コマンド行インタフェースのロギング機能

新規の「-l」オプションは、コマンドの獲得、比較、生成および実行のロギングを有効にする場合に使用します。ロギングを有効にすると、操作中に GUI で表示されるのと同じメッセージを DOS ウィンドウにも表示できます。デフォルトでは、操作の処理中、DOS ウィンドウにはメッセージが表示されません。

5.1.2 Oracle Performance Manager

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 の Performance Manager には、次の機能が追加されました。

- データベース・パフォーマンスの状態が一目でわかる、新しいデータベース状態概要による、リアルタイム・パフォーマンス監視およびトラブルシューティング機能の向上。
- 診断レポートの拡張。

5.1.3 Oracle Advanced Events

Oracle Standard Management Pack リリース 2.2 の Advanced Events に、一連の事前定義イベントが追加されました。

これらのイベントにより、Oracle Enterprise Manager イベント管理システムの機能が拡張されました。

5.2 一般的な問題

1. マルチバイト環境では、Enterprise Manager コンソールから特定の Oracle Management Pack アプリケーション（Performance Manager、Capacity Planner および Change Manager）を起動すると、実行中の同じコンソールから続いて起動した他のアプリケーションでは、テキストが正常に表示されない場合があります。このような問題を避けるために、マルチバイト環境では、Performance Manager、Capacity Planner および Change Manager をコンソールからではなく、Windows の「スタート」メニューから起動することをお勧めします。万が一この問題が発生した場合は、コンソールを再起動し、Windows の「スタート」メニューでアプリケーションにログインすると修正できます。（Bug#1344568）

5.3 Oracle Change Manager

5.3.1 一般的な注意および確認済の問題

1. エントリが数千におよぶ履歴では、履歴ダイアログ・ボックスの起動にかなりの時間がかかる場合があります。履歴レコードを取得する問合せのパフォーマンスを高めるには、リポジトリ・スキーマにある VBZ\$HISTORY 表で、object_type、object_owner および object_name に索引を追加できます。（Bug#1274702）

5.3.2 データベース・オブジェクトの比較

1. 名前の異なる 2 人のユーザーの特性を比較するには、スキーマ・マップを使用して、この 2 ユーザーを一致させます。このためには、比較するスキーマ・オブジェクトのタイプを、少なくとも 1 つ指定し、比較からスキーマをすべて除外します。これにより、ユーザーの他に、スキーマ・オブジェクトが比較されるのを防ぎます。
2. 32KB より大きい PL/SQL オブジェクトを含む差異が検出された場合、比較を保存できません。（Bug#1337177）
3. 相互比較中にスキーマをマップすると、対応するユーザーは表示されないことがあります。比較が保存された後で復元される場合には、この問題は出現しません。（Bug#1334680）

5.3.3 ベースラインの作成

1. 「ベースラインの作成」アプリケーションで「SQL を生成」を指定し、ベースラインを後で獲得するように指定した場合、ベースラインを獲得する際に SQL は生成されません。SQL は、ベースライン獲得後に Baseline Viewer で生成できます。(Bug#1041775)
2. バージョン 7.3.4 の Oracle データベースでは、キャラクタ・セットが ASCII とは異なるため、ベースラインを獲得できません。ORA-01026 エラーが発生して、獲得に失敗します。(Bug#1171762)

5.3.4 コマンド行インタフェース (CLI)

1. Windows95/98 では、CLI コマンドを実行する DOS ウィンドウで、環境変数領域を増やす必要があります。DOS ウィンドウからプロパティ・ページを起動し、メモリーのタブで初期環境値を増やします。(Bug#1154171)
2. Windows 95/98 では、CLI の起動の問題を回避するために、次の手順に従ってください。

1) oemapp.bat ファイルのバックアップ・コピーを作成します。

2) \$ORACLE_HOME\bin ディレクトリにある oemapp.bat を開きます。

3) 次の行を:start95 セクションの先頭に追加します。

```
if "%2" == "ocmcli" goto start95ocmcli
```

4) 新しいセクション:start95ocmcli を作成します。

5) ":start95ocmcli"セクションの下に、次の行を追加します。

```
set OCM_CLI_LOGIN_STUFF=-Docm_cli_login
```

```
set OCM_CLI_LOGIN_INFO=%OCM_CLI_LOGIN%
```

6) ":startNT"セクションの下にある行"%NT_START% %JRE%"をコピーし、":start95ocmcli"セクションの下に貼り付けます。

7) %OCM_CLI_LOGIN_STUFF%=%OCM_CLI_LOGIN_INFO%

before %JREOPTIONS_STRING%を":start95ocmcli"セクションの下に貼り付けた行に追加します。

8) 文字列%NT_START%および%1 を、":start95ocmcli"セクションの下に貼り付けた行から削除します。

新しい":start95"セクションは、次のようになります。

```
:start95
```

```
if "%2" == "ocmcli" goto start95ocmcli
```

```
launchem.exe %2 %3 %4 %5 %6 %7 %8 %9
```

```

goto end

:start95ocmcli
set OCM_CLI_LOGIN_STUFF=-Docm_cli_login
set OCM_CLI_LOGIN_INFO=%OCM_CLI_LOGIN%
%JRE% -DORACLE_HOME=your_oracle_home %GBP_PROP%
-DORBdisableLocator=true
%OCM_CLI_LOGIN_STUFF%=%OCM_CLI_LOGIN_INFO% %JREOPTIONS_STRING%
-%CLASSPATH_QUAL% %CLASSPATHADD%
oracle.sysman.vtx.vtxOemApp.OemApp %2 %3 %4
%5 %6 %7 %8 %9

goto end

```

9) DOS プロンプトで、ocm と入力します。

ocm cli がそれでも実行されない場合は、oemapp.bat 内のそのコマンド行の文字が 1024 文字を超えていることを意味します。(Windows 95 および Windows 98 には、1024 文字の文字制限があります。)

この問題を修正するには、2 つの方法があります。

- 1) "subst" コマンドを使用して、\$ORACLE_HOME にコマンド行を短くするドライブ名を代入します。この結果、oemapp.bat で出現するすべての\$ORACLE_HOME を検索し、代入したドライブ名に置き換えることが必要になります。

たとえば、subst T: D:¥ORACLE_HOME の場合を考えてみます。

oemapp.bat 内の 1 行が、次の行だとします。

```
SET CLASSROOT=D:¥orant22¥classes
```

この行は、次のように変更する必要があります。

```
SET CLASSROOT=T:¥classes
```

- 2) もう 1 つの方法は、Change Manager のインストール時に、短い ORACLE_HOME 名を使用することです。

(Bug#1371561)

5.4 Oracle Performance Manager

1. グラフのウィンドウが小さくて、グラフを表示できない場合は、グラフに凡例のみが表示されます。データを表示するには、ウィンドウのサイズを変更します。

2. Windows NT のホストのディスク統計を収集するには、Performance Manager または Capacity Planner を使用する前に、Windows NT でディスク統計の収集を使用可能にする必要があります。これは、監視対象ホストで、コマンド `diskperf -Y` を入力して行います。これで、次回システムを再起動すると、ディスク統計が有効になります。
3. ユーザー定義のグラフでは、他のグラフへのドリルダウンをサポートしていません。
4. グラフを表示し、画面から消すたびに、メモリー・リークが発生するため、ツールを再起動し、モニターで使用されているメモリーを解放する必要があります。（Bug#682636）
5. 類似作成機能を使用して、ユーザー定義のグラフをあるデータベースから別のデータベースへコピーする場合、問合せで "select *" を使用し、ターゲット・データベースの列数が異なると、未処理の `ArrayIndexOutOfBoundsException` が発生します。（Bug#784409）
6. グラフ名にアポストロフィが含まれていると、そのグラフは表示できません。（Bug#681800）
7. ロック・グラフからセッションを削除する場合、確認のダイアログは表示されず、ただちにセッションは削除されます。

5.5 Oracle Advanced Events

1. データベース警告、データ・ブロック破壊、セッション終了、アーカイバの停止、Data Gatherer 警告の 5 つの拡張イベントは、自動的に消去されません。これらのイベントのいずれかが発生し、問題が手動で解決された場合、問題が手動で解決されたことを自動的に検出する方法がないため、イベントは自動的に消去されません。したがって、イベント発生の原因となった問題の解決後、イベントを次のように手動で消去する必要があります。
 - EM コンソールにあるイベント画面の「警告」タブで、発生したイベントを「履歴」タブに移動します。
 - 「履歴」タブで、このイベント発生を削除します。
 - これらの手順によりイベントが消去され、このイベントのために警告として設定されていたグループ画面の赤い旗もリセット（緑に変更）されます。
2. SysStat イベント、SysStat Delta イベントおよびユーザー定義 SQL イベントでは、場合によっては、警戒の旗が立ち、「整数値が大きすぎて表示できません」というメッセージが表示されます。これは、これらのイベントのためにチェックされる統計に、符号付き整数で表現可能な範囲より大きな値が含まれているものがあるためです。（Bug#637664）
3. スワップ・イベントでは、スワップ・インとスワップ・アウトは区別されません。ページング・イベントでは、スワップ・インおよびスワップ・アウトの合計値を累計的に監視します。2 つの値は区別されません。（Bug#739646）
4. ディスク満杯およびディスク満杯 (%) イベントでは、ワイルドカードまたは >1 のパスは使用できません。ユーザーは、ディスク満杯およびディスク満杯 (%) イベントのパラメ

ータとして、ノード上のすべてのディスクを表す「*」を入力することはできません。
(Bug#752982)

5. Windows NT では、フォルダ「論理ディスク」の下の子・イベントである空き領域(%)、空きメガバイトを使用できません。これらのイベントに関するヘルプおよびドキュメントの情報は、無視してください。(Bug#1350889)
6. 一部の拡張イベントは、データベース内のセグメント、データファイル、表領域およびエクステンツの数の影響を受けます。このようなイベントとしては、小容量、セグメントの高速拡張、最大エクステンツ、複数エクステンツ、表領域満杯、連鎖行、索引再作成があります。これらのイベントについては、登録するイベントで参照するオブジェクトの数を減らすことをお勧めします。最大エクステンツ・イベントを例にとると、デフォルトの「*」(すべてのセグメント)を使用せず、監視の必要な最も重要なセグメントを対象にするように、このイベントを制限できます。
7. リリース 8.1.7 以前の Intelligent Agent を使用する場合、最大エクステンツ・イベントを 5 つのオブジェクトに登録するというように、複数のオブジェクトに対して 1 つのイベントに登録すると、このオブジェクトのいずれかがイベントのしきい値を超えた時点でイベントが発生します。ただし、続いて別のオブジェクトがイベントしきい値を超えても、イベントは再び発生しません。(Bug#738833) この問題は、8.1.7 以降の Intelligent Agent に対してイベントに登録する際には発生しません。
8. Windows NT では、フォルダ「物理ディスク」の下の子・イベントテストである平均ディスク・キュー長、平均ディスク読み込みキュー長、平均ディスク書き込みキュー長は使用できません。これらのイベントに関するヘルプおよびドキュメントの情報は、無視してください。(Bug#1355912)
9. Windows NT では、NT のパフォーマンス モニタで、オブジェクト「ネットワーク・インタフェース」が参照できない場合、フォルダ「ネットワーク・インタフェース」の下にイベントに登録しようとすると、「スクリプト失敗」のエラーが表示されます。
10. NT 上のディスク統計（「物理ディスク」フォルダの下の子・イベント・テストなど）を監視するには、"DISKPERF-Y"を実行し、マシンを再起動する必要があります。

5.6 Oracle TopSessions

1. TopSessions の自動リフレッシュ間隔が、実際にリフレッシュにかかる時間より短い場合、TopSessions では連続ループ内でスラッシングが発生します。ループを中断するには、ツールバーの「リフレッシュ・モード」ボタンをクリックし、手動リフレッシュ・モードに切り替えます。
2. TopSessions の自動リフレッシュで、長期間（数時間）にわたり、極端に短いリフレッシュ間隔（20 秒未満）を指定しないでください。システム・リソースの使用率が過剰になります。